

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 9 月 6 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03105

研究課題名(和文)とっさの判断から展開する対話、表現活動を取り入れた授業内活動の設計、実施と評価

研究課題名(英文) Design and analysis of media production class based on students' dialogue and production in collaborative work

研究代表者

保崎 則雄 (Hozaki, Norio)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：70221562

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：2023年度は本研究の最終年度の研究総括として、分析対象の大学授業のメディア制作でのグループ作業の分析を行なった。受講生のコメントでは、授業開始当初は映像制作作業では、個別制作を希望していた学生の多くが、授業後のインタビュー調査で、グループ作業の良さ、意義を述べていた。主な理由は、自己だけのリフレクションでは気付けないこと、修正点などが、グループメンバーとの意見交換、異なった視点、価値観などが加わり、毎週の議論でそのことに気づき、深まるからであり、葛藤や回避、妥協、合意形成の重要性がわかったという回答であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

映像制作の授業は、美大、芸大、専門学校などで行われているが、普通の大学の学部授業で表現力、映像理論、映像制作、メディアプレゼンなどの効果的な方法まで含む授業は重要である。学生は授業に強く興味を持ち、その制作過程で、「思ったような表現ができない」ということをしばしば述べた。これは文字表現ばかりに重きを置く現代の教育の課題でもある。音声言語、音楽、映像、身体という表現モードの知識、経験、活動が圧倒的に不足している。本研究では、映像や音声モード間のシームレスが連携を目指しておこなう授業実践を対象として4年間受講生からデータを収集し、分析してきたのでそこに社会的な価値や意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：As the final year of the present research, the class, Media Production Studies was analyzed in terms of mainly in-class communication. Students' out-of-class communication toward the media production work was additionally analyzed. The online interviews were conducted and found the following results. One finding was all of the interviewed students responded they preferred an individual work of media production at the beginning of the semester. In other words, collaborative group work was not much favored in September. However, in the final project they worked on an individual basis, they noticed production work in group was more important and meaningful to reflect their work and expand their cognition toward more effective visual communication and production. Another finding was the students was a little difficult to combine the content of the assigned reading with what they represented in the production work to be completed every two weeks.

研究分野：教育コミュニケーション

キーワード：映像制作 表現モード 教育プログラム 協働学習 映画理論 言語コミュニケーション 葛藤 ネゴシエーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2020年4月から開始された本研究は、当初、研究対象、研究フィールドは実際の大学講義室内で展開される学生同士、学生と教員で生起される言語・非言語コミュニケーションであった。しかしながら2020年度の授業開始直前になってコロナ禍が始まり、急遽調査、研究対象の大学の対面式授業の実践ができなくなった。その結果、初年度である2020年度から大きな修正をあらかじめ求められた。当初の研究計画段階から研究対象としていた授業を変更して、オンライン実施した「Media Production Studies」以下MPS(2001年度～)の授業のデザインを、状況に合わせて修正変更し、全授業回を同期型(real-time)オンライン教育にしたものを対象にデータ収集、調査を始めた。その中でも受講生の授業内外でのコミュニケーションに注目して主にオンラインという学習メディアの属性下での学び、葛藤、コミュニケーションに焦点を当てて分析した。そこには、教員と学生とのより活発で主体的なコミュニケーションを高める工夫として、授業終了後にLMS(Moodle)上で配布するReflection Sheetも加えることとした。そのような中、2020年度は学生の葛藤も大きく、大学のLMSに加えてZoomを用いた同期型オンラインでの学びにおいて幾つかのことが徐々に明らかになった(5.の業績参照)。

2. 研究の目的

①対面式の授業と異なり、同期型オンラインスタイルで学ぶ受講大学生の持つ葛藤、工夫、知恵、妥協とはどのようなものであり、それがどのように展開するのかということ明らかにすることを本研究の目的とした。

②さらに、それらの葛藤を経験しつつ、グループ協働作業の中でどのように合意形成し、学習コンテンツの理解に繋げ、グループでの映像作品制作とプレゼンテーションという課題に取り組むのかというプロセスをインタビュー調査を通して明らかにすることも本研究の目的とした。

3. 研究の方法

MPSでは、授業の3つのステージ終了後に行う、同じ内容の質問紙調査を実施して、その3回分のデータを定量、定性的に分析した。

また、毎授業終了時にReflection sheetをMoodleにアップロードし、学生はRSをダウンロードし記入し、Moodleのレポート提出フォルダに提出した。記入は自由、成績に含めないReflection Sheet(14回実施/学期)への書き込みと教員からのフィードバックを総合的に分析した。ちなみに、RSへのレスポンスは印刷後に手書きをして、PDFにして、返却はメール添付という方法で全14回を行った。

さらに学期終わりに実施した「授業アンケート」で授業内容、自分の学び、授業評価などを行ったものを統合的に分析した。

4. 研究成果

いくつかのことが明らかになったのであるが、まず受講生はオンラインでの学びという新しい環境に合わせた学びをかなり自主的に構築していった。同時に2020年当時にはかなりの葛藤を抱えた学生もいたが、オンラインでの学びを毎学期、他の授業でも経験していき、トラブル解消法を身につけただけでなく、むしろ新しい学びのスタイルを徐々に構築して、馴化していく様子が明らかになった(5.の業績参照)。

具体的には、葛藤、コンフリクトを避ける、コンフリクトを抱える、コンフリクトを解消するという3つの特徴が授業内外での活動で見られたことであった。その中でも解消の仕方というものは、授業後の受講生へのインタビューの文字起こしデータの分析から明らかになったが、学生は課題(正解が一つに定まらない問いへの答である、毎回の課題遂行の映像制作)への取り組みと対人コミュニケーションやネゴシエーションの過程で迷いながら、コンフリクトなどを抱えながら、徐々に個人が学びと気づきを深めつつ、対応している様子が明らかになった。オンラインでのものづくり(映像制作)の協働が徐々にではあったが、課題遂行という目的に向かって、様々な手法、状況、方法、コミュニティ、自分たちで定めて規則の遵守と修正という活動を経由して進んでいくという発展した活動理論が当てはまる様相が諸所で観察されたことは興味深かった(Figure 1参照)。

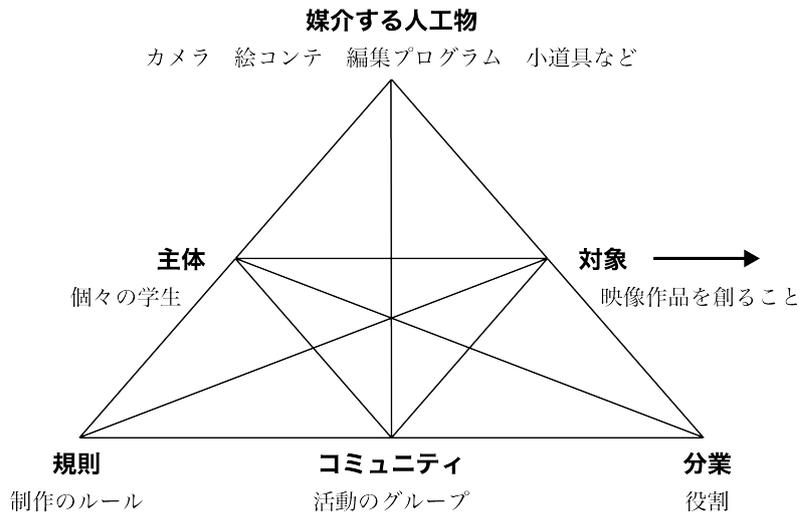


Figure 1 「MPS」を活動理論に当てはめた概念図

(本図は、[The basic mediational triangle expanded] *Distributed Cognition* (p. 8), by Cole and Engeström, 1993, New York: Cambridge University Press. を参考にして適宜和訳し、授業実践に合わせて加筆したものである)

授業外の協働制作活動における対面での作業量・作業回数は2020年度と比較して2021年度では著しく増加した。つまりグループメンバーが会って話し合う、撮影する、編集するという一連の作業での個別作業とグループ作業の有機的な使い分けが特徴的であった。このことは2020年度ではほとんどの制作活動をオンラインメディアシステムを模索してやっていたこととそれが故のコンフリクト発生という点と目立って異なる点であり、このことは論文として報告した(5.の業績参照)。さらに2年間分のデータを分析した結果明らかになったこととして、教員側も学生側も共通して対面が全てではない、棲み分けを上手く工夫することによって、学びは進み、互いの理解も進むということであった。このことは出版物(5.の業績参照)でも報告している。簡潔に述べれば、オンライン式授業は対面授業の補完ではない、ということである。2020年4月に世界的にも人と接することが少なくなることに重きが置かれ、我が国でも通学、対面方式の、今までは当たり前に行われていきた授業形態が停止を余儀なくされ制限もされたが、この2020年度からの国内での教育実践で、それまでのオンライン教育の教育実践、教育研究が圧倒的に脆弱であったことが露呈した。そしてこのことは当該研究者の元にも、海外の教育研究者から驚きと批判という形で寄せられた。「なぜ、これだけICTが発達している日本でそのような不自由、不便が起きるのか。」と。本研究でデータを取り、学生と話し、データを分析しつつ、授業を毎年実践してそのギャップの本質が一部明らかになったことは一番大きな研究成果であると考え(5.の業績参照)。

研究の成果をさらに堅固なものとするために研究を1年延長した2023年度は、対面型に戻ったMPSの春学期の授業の分析し、関連分野の学会誌に投稿したもの(5.の業績参照)を踏まえて、同じオンラインでの学び、コミュニケーションの分析発展させ、社会人大学、eスクール科目「メディアコミュニケーション学」の14週の授業に広げて分析した。分析対象としたのは、主に、毎回のオンデマンド授業映像視聴後に各受講生がMoodle上のフォーラムに書き込む2種類の書き込みメッセージである。2種類の書き込みは、1) 授業映像視聴に関する理解、疑問などのコメント、2) 他の受講生の書き込みについてのコメントや追加情報、意見など、

の2種類である。つまり、この2)の文字コミュニケーションを対象として分析を行うに至った。

その分析の結果、明らかになったことは以下の通りである。授業内容がフォーラムでのディスカッションでのコメントのしやすさという要素と関係してはいたが、その書きやすさというのは教員側の書き込みのタイミング、文体、創発性への工夫といったことばかりに起因するのではなく、社会人受講生の書き込みのマナーや問題提起のやり方、お互いのコメントへの関わり方といったことに起因していることが、学期最後の「授業の振り返り」の内容を読んで明らかになった(論文投稿準備中)。さらに、社会人大学生の自主的な学びの様相が相互に学びを深めて拡張しているということが明らかになった。100名ほどになる受講生では、年齢、職歴、経験知、現在の仕事などが受講生の数だけ異なって存在するため、学びの展開も実に多様で互いに刺激しあっていることもわかった。海外在住の受講生も何名かいて、外国籍の受講生も数名は授業を受講しており、同様に1)ディスカッション活動への参加の肯定感、2)教員側からのコメント内容の有用性、3)オンデマンド授業映像の内容や文字でのディスカッションへの手応えというものが、学びへの積極性へとつながっていることが明らかになった。これらのことから総合的にオンラインのみでの授業において、学びが深まる要素というのは、教え方の適切性、わかりやすさというだけではなく、学びのコミュニティ(教える側と学ぶ側)における参加者属性というものが大きな影響を与えることが再確認されたということは、授業の原点回帰のような視点で考えて興味深い。

今後の研究課題への発展として考えられることは、まず、対面式の授業が中心になってきている2024年現在だからこそ、オンライン形式での授業への関心、それも平常時での関心、実践、評価、研究という流れを絶やさないことであろう。それは、上記にもあるように、オンライン方式は、対面式教育の補完ではない、あってはならないという強いメッセージである。同時に今回はたまたまコロナ禍という原因ではあったが、この4年間のオンライン中心の授業スタイルから対面式に移行してきた教育実践で学び、蓄積した経験知を少なくとも教育関係者者は、継続発展させる責務がある。円弱という別の社会的な状況で(学位)留学も減っている現在、オンラインでの学位習得、MOOC、SNSのような学びのコミュニケーションシステムなどを最大限活用するための言語習得も新たに見えてきた現代的な教育課題である。

次に、これは研究4年目により明確になったeスクールのような所で学社会人大学生の見直し、再評価ということである。年齢、職業、国籍、経験が実に多様な学習者は、想像していた以上に主体的、独立的に、互い(の文字コメントで)に学び合うということがわかった。このことは高齢者の方向への展開ばかりでなく、若年齢の方への拡張も十分可能である。それは単にかつての飛び級という一面的なものではなく、異年齢の学習者同士の学びへの参加という意味を深く調査する必要である。最初の研究期間の3年間でわかったことは、近似の年齢層での相互の学習内容での学びは、その学びのコミュニケーション過程において、葛藤、摩擦などの調整、解消に想像以上に時間、労力をかけ、対応していくことが明らかになった。

最後に、社会人大学での今回の調査でわかったことは、教え(過ぎる)から学ばないという言葉で表せそうである。多くの面で初学の段階では教え込むことも重要であるが、それでも教育関係者、あるいは親なども含めて、教えれば学ぶ、多くを教えればより多くを学ぶに違いないという思考に過度に陥ることは再考、熟慮の必要があるだろう。

当たり前、常識を疑って考え、そして実践しつつ考え、修正し、今まで言われてきたことを疑わずにただただ実践することの危険性に関して、4年間の本教育実践研究においてデータ収集、分析して再確認できたことは最重要な研究成果となるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 富永麻美 保崎則雄	4. 巻 36
2. 論文標題 学生がオンラインで映像制作を協働する過程において 形成される態度と変容する意識	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 早稲田大学「人間科学研究」	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 富永麻美 保崎則雄	4. 巻 29(2)
2. 論文標題 創造性を創発し、協働での学びを育てる授業「Media Production Studies」のデザインと実践、その評価	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育メディア研究	6. 最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 富永麻美 西村昭治 保崎則雄
2. 発表標題 社会人大学eスクールの授業においてディスカッションが継続して展開するスレッドの特徴の分析
3. 学会等名 第30回大学教育研究フォーラム 部会8-1
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 保崎則雄 第2章分担執筆（山地弘起編著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 239
3. 書名 共生社会の大学教育	

1. 著者名 保崎則雄 富永麻美 北村 史	4. 発行年 2023年
2. 出版社 唯学書房	5. 総ページ数 169
3. 書名 対話を重視した新しいオンライン授業のデザインを創る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤城 晴佳 (Fujishiro Haruka) (00824559)	東洋大学・情報連携学部・助教 (32663)	
研究分担者	山地 弘起 (Yamaji Hiroki) (10220360)	独立行政法人大学入試センター・独立行政法人大学入試センター・教授 (82616)	
研究分担者	斎藤 隆枝 (Saito Takae) (20827802)	国際医療福祉大学・総合教育センター・助教 (32206)	
研究分担者	土井 香乙里 (Doi kaori) (60409703)	ものづくり大学・技能工芸学部・講師 (32422)	
研究分担者	北村 史 (Kitamura Fumito) (90613860)	長崎大学・情報データ科学部・助教 (17301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------